後期富士谷学派の歌道についての基礎的研究

――『結脚抄師説』『挿頭抄師説』の検討――

但馬貴則

はじめに

富士谷家の歌道といえば、『かざし抄』や『あゆひ抄』などの語学的研究を中心とした成章の歌学と、『北邊臆脳』や『眞言辨』などに代表せられる御杖の歌論とを挙げるのが一般的である(1)。しかしてそれらに対する評価の実際はどのようなものであるかというと、成章の場合は、その語学的要素が本居学派に取り入れられて近代以後の文法学に直結していったというものであり(2)、御杖の場合は、その歌論が、前後に師承の系統を持たない、孤立したものであった(3)というように、それぞれ個別に論ぜられるばかりで、御杖の没後も、明治以後まで継承せられていった学統であるという意味での、富士谷家の学としての全体的な歌道のあり様についてはいまだ十分な考究がなされていないというのが現状である。そこで本稿では一つの試みとして、従来あまり顧みられることのなかった御杖没後の富士谷学派――今私に「後期富士谷学派」と呼ぶ――の歌道関連の資料、具体的には成章学説の註釈書という体裁をとっている

①結脚抄師説（写本　全五冊）

②挿頭抄師説（写本　全三冊）

の二点を取り挙げ、そこに扱われているものの何たるかを検討することで、富士谷家の歌道の全体像を明きらめる足掛かりとしようとする。

資料の書誌

①結脚抄師説

1所蔵　京都大学文学部（國文學5C—24）。なお、『挿頭抄師説』とも各巻末に「合田文庫」の所蔵印を有する(4)。

2大きさ（匡郭内）　縦二四・四（一九・一）糎×横一六・九（一三・四）糎。

3装丁　四ツ目綴じで、水色の表紙を有する。

4構成　五冊それぞれに「乾、元、亨、利、貞」と巻名が付けられている。丁数及び註釈を施す『あゆひ抄』の本文の範囲を示すと、次のようになる。

乾…墨付一一二丁。「おほむね上、下」及び巻一（五属）の全文。

元…墨付七三丁。巻二の全文（十九家のうち「曽」から「志」まで）。

亨…墨付五七丁。巻三の全文（十九家のうち「乃」から「加天良」まで）。

利…墨付六五丁。巻四（六倫）の全文。

貞…墨付七五丁。巻五（十二身、八隊）の全文。

＊貞巻の冒頭（巻五冒頭の目録に該当する）まで、「おほむね」や目録も含めて項目毎に丁付がなされている。本稿では引用に際して、丁付のある場合はそれを用い、ない場合には『挿頭抄師説』とも、私に丁付を与えることとする。

5外題　左上に書名と巻名、右上に取り扱う項目が示されている。なお書名は五冊ともすべて『結脚抄師説』である[5]。

6内題　刊本『あゆひ抄』を踏襲している。

7本文　「發揮堂藏」とある用紙を用いる。半丁あたり九行（罫線あり）。はじめに『あゆひ抄』の本文や証歌（引歌という）を示し、その下（引歌の場合は左）に片仮名の割註を付している。また欄外に片仮名で朱と青の書入が多数ある。

8註釈者　割註には「成文曰」と「比曰」（これは「おほむね」が中心）とがある。このうち、「成文」は、御杖の末子で、富士谷家で家説の歌道を継承した最後の人物と考えられる[6]富士谷成文（明治二二年没　祥運、鹿運、元廣とも）をさし、また「比」は元巻の「成文云」ではじまる朱の書入で、「比云」とある書入を「比レヲノ説」として引用している（曽家一丁表）ことから、御杖晩年の門弟である野口比禮雄をさすものと思われる。また欄外の書入は、朱のほとんどが「成文云」、青のほとんどが「比云」となっているが、朱のそれの一部には「杖云」や「美云」とあるものも見える。このうち前者は御杖、後者は比禮雄同様に御杖晩年の門弟である福田美楯の説を成文が引用したものと考えられる（筆勢が「成文云」の書入と同じである）。

9その他の資料との関連　福田美楯の著作と考えられる成章学説研究書[7]の『富士谷北邊家奥呂九ケ條傳』（写本　一冊　京都大学文学部所蔵　『富士谷成章全集　下』に翻刻あり）の術語や、野口比禮雄が『かざし抄』と『あゆひ抄』の術語を整理した『北邊家説四具附名目抄』[8]（天保十四年写本　一冊　慶應義塾大学図書館所蔵）が成章の術語に付した記号などを本書ではしばしば見ることができる。その美楯や比禮雄については竹岡正夫氏が『富士谷成章全集　下』に「御杖歿後も成文などを援けて、種々富士谷学派の維持に努力している」と述べている（八〇七頁）。

10従来の扱い　影印も翻刻もなされてはいないが、存在自体は古くから知られている。たとえば松尾捨治郎氏は『か

ざし抄』（昭和九年大岡山書店）所収の「富士谷成章の傳記及び學説に就いて」でこの書を成章学説の末書のひとつとして紹介しており（一一～一二頁）、成章学説研究の第一人者である竹岡正夫氏も「富士谷学派の『あゆひ抄』研究を集大成したもの」（『富士谷成章全集　下』九九六頁）と述べた上で、その記述の一部を『あゆひ抄』解釈に利用しているのである。

②挿頭抄師説

1所蔵　京都大学文学部（國文學5C—25）。

2大きさ（匡郭内）　縦二四・〇（一九・一）糎×横一六・六（一三・四）糎。

3装丁　四ツ目綴じで、薄茶色の表紙を有する。この表紙には「丸に浮線花菱」の模様があり、管見の範囲では、同じものが、やはり後期富士谷学派の資料で、明治二九年の識語を有する静嘉堂文庫所蔵の写本『四具攷證録』(9)の表紙にも用いられている。

4構成　巻名は「上、中、下」で、註釈を施す内容は、上巻に序文である「挿頭題」（本書では「序」とのみある）を有する点も含めて、刊本『かざし抄』にそのまま対応している。また丁数は以下の通りである。

上…墨付六五丁。

中…墨付五〇丁。

下…墨付四三丁。

＊丁付は上巻の「序」（挿頭題）にのみなされている。

5外題　左上に書名『挿頭抄師説（上中下）』がある。

6内題　刊本『かざし抄』のそれを踏襲しているが、上巻のみ本文内題とは別に「かさし抄　冨士谷口傳」とある。

7本文　用紙は『結脚抄師説』と同じものを使用している。註釈の形態も『結脚抄師説』とほとんど変わらないが、

欄外の書入は朱のもののみである。

8註釈者　割註、書入ともほとんどが「成文曰」「成文云」、あるいは無署名のもののみで、『結脚抄師説』に頻出している野口比禮雄の名は見えない。

9その他の資料との関連　前に記すごとく比禮雄の関わる記述がないこと、『あゆひ抄』と重複する証歌が『かざし抄』にある場合は

　此哥脚ニ出タリ（上巻　二九丁裏「いくばくの田をつくればか時鳥しでのたをさをあさなあさなよぶ」への割註　「脚」は『あゆひ抄』をさす）

のように、『結脚抄師説』に譲ってくわしく言及していないことなどから、富士谷成文が単独で『結脚抄師説』の手法を『かざし抄』の註釈に適用したものと考えられる。なお『結脚抄師説』同様に『奥呂九ケ條傳』と共通する術語が見える。

10従来の扱い　旧帝國大學時代の受入番号（160682　大正5・3・22）が『結脚抄師説』と同じであることから同時に納入せられたことが知られ、ふたつながらその存在が知られていてもよいはずではあるが、竹岡氏などに代表せられる成章学説の研究書には、この『挿頭抄師説』はまったく取り挙げられていない。また影印や翻刻がなされていない点は『結脚抄師説』と変わらない。

内容の検討　―特徴的な研究姿勢―

一、成章学説への註釈

竹岡氏が『結脚抄師説』について「富士谷学派の『あゆひ抄』研究を集大成したもの」と評しているように、『結

脚抄師説』『挿頭抄師説』とも、基本的には『あゆひ抄』『かざし抄』の学説の、ほとんどすべてにわたって註釈を試みようとしている。それは、たとえば、『あゆひ抄』の

今あゆひの心をとかむとするにまづいつゝのまきをわかちしるべし。たぐひにすぶべきいつゝ。家にあつむべき十あまりこゝのつ。ともによるべきむつ。身にたとふべき十あまりふたつ。つらにつらぬべきやつなり

（刊本　おほむね二丁裏～三丁表）

に対する比禮雄の

先ヅ五ツノ巻ノ大旨ヲ云ハンニハ五ノ属ナリ。咏、疑、願、誂、禁ノ五ツヲ一統シタルヲ云。皆其心ヲ取リテ統ベタリトアリ。家ニ集ムトハ、其脚ノ立居セヌ故、動カヌニヨリテ家ニ喩ヘタル也。此レ十九アリ。倫ハ乃チ人倫ノ類、身ハ十二身ニテ、倫身相似タリ。此ハ立居スルヨリ名付ラレタル也。隊ハ立居セヌ状、家トモ異ナリ

（『結脚抄師説』乾巻　おほむね五丁表　傍線原文）

のごとき、純然たる学説解釈といい得るもの(10)から、

可倫（「カリン」と振仮名）、介隊（「ケタイ」と振仮名）、コレ読クセナリ　（十二丁裏　傍線原文）

のような、術語の読み方といったところにまで及んでいるのであるが、その中で特徴的であると考えられる記述を挙げると

A音義説

B呼応関係への関心

となる。ここでは、この二点について見てゆく。

まずは、Aの音義説である。

『結脚抄師説』には、以下に示すような、脚結を音義的に解釈しようとした記述が見られる。

a『あゆひ抄』の「屬」（「咏、疑、願、誂、禁」の意味を持つ助詞）の多くがア段の音である（「や」「か」「な」など）ことへの説明（比禮雄）。

ヤ、カ、ナノ三ツハ、共ニ「ア」ノ緯（＝母音）ニテ、天ノ位ナリ。天ハ即チ高天ガ原ニテ、人力ノ及ビ難キ処也（中略）五屬ニ別ニ出セレドモ、前ニ云如ク天ノ義ニテ人力ノ及バヌ筋ハ、皆一ツナリ。其中ヨリカク疑、咏、願、誂ト幾筋ニモ分ル、ナリ　（乾巻　おほむね六丁裏　なお引用中の「　」は、実際には□の囲みである）

b『あゆひ抄』の「疑屬」（疑問の係助詞）における、「か」と「や」との違いへの説明（成文）。

かハ聚ナリ。やハ鮮ナリ。廣、聚、結、臨、着、到、対、鮮、動、狹ノ内ナリ。其義ナリ。やハ勢ヒガソレ丈ニ大キク廣イ也　（乾巻　疑屬二丁表～同裏）

かハ聚メテセマク、やハ鮮ニシテ廣シソレ丈勢ヒガ違へり。　（乾巻　疑屬二丁裏～三丁表）

この「天」や「聚」「鮮」などは、『結脚抄師説』の「經緯圖」―五十音図―に見ることができる。すなわち、成章の『あゆひ抄』の「經緯圖」（おほむね十三丁表）が単に五十音図を示すにとどまっているのに対して、『結脚抄師説』では五十音図の「緯」に

あ―い―う―え―お
天―山―里―海―根―

また「經」―子音―には

あ―か―さ―た―な―は―ま―や―ら―わ
廣―聚―結―臨―着―到―對―鮮―動―狹―

という義を与えているのである（乾巻　おほむね廿三丁表）。

これと同じ音義説は、管見の範囲では、以下の資料にも見ることができる。

（一）『阿遥比抄乎須受』（『脚結抄小鈴』とも　写本　全五冊　京都大学文学部所蔵）
（二）『經緯圖本義』（『新編富士谷御杖全集　第七巻』（三宅清編纂　昭和五四年思文閣出版）所収　ただし「附録」とせられている）
（三）『奥呂九ケ條傳』
（四）『装圖解』（写本　一冊　京都大学付属図書館所蔵）
（五）『装鈔圖説引證』（写本　一冊　東京大学文学部所蔵）

このうち、先に記した（三）以外の資料について説明すると、（一）は、その奥書から、御杖が簡単な註釈や証歌の増補を施した『あゆひ抄』を福田美楯が写本の形で広めたものの一つであると知られるものである[11]。また（二）は、三宅氏が解説で「御杖の自著であるといふよりはその門流の編む所である」（三六頁）と述べるものであり、（四）はその奥書に「明治十九年二月廿四日写」とあって[12]、たとえば（三）や『結脚抄師説』などと共通する記述も多く見られる。そして（五）は、その奥書や所蔵印から、福田美楯の次男赤松佑以の門人であった梅村参内が関わった資料と知られるものである[12]。ところで、富士谷家の歌道における音義説的要素は、国語学史では概して御杖から始まったとせられており[13]、この「經緯圖」も（一）に見られることから御杖以来のものと考えられなくもないのであるが、ただ『御杖全集第七巻』所収の、御杖の著であることが明らかな音義説関連の資料（『俳諧』や『經緯畧辨』など）には、これらと同じ音義説はまったく見当らないのであって、そのことから、あるいは後期富士谷学派に特有のものという可能性も考えられるのである。

この「經緯圖」の音義説について成文は、

名、挿（挿頭）、装、脚（脚結）、一字一字ニ五十韵ニ当リ義理ヲ付ル也　（『結脚抄師説』乾巻　おほむね一丁裏）

と述べ、研究対象となる歌語はすべて音義説で解釈し得るとしている。ただし、実際の音義説の適用は、先に示した

a、bの二点にとどまっている。

次に、Bの呼応関係への関心である。

成章は、呼応関係全般に対して『あゆひ抄』で「うちあひ」という術語を与えてはいるものの、それは「そのあゆひごとにさだまれるのりある」（おほむね七丁表）もの、すなわち脚結や挿頭の個別の問題であるとして、呼応の形態については、たとえば同時代の本居宣長の『詞瓊綸』のような関心はあまり払ってはいない(14)。これに対して成文らは、おもに宣長の学説を援用して、呼応関係についてかなり多く言及している。具体的には

Ⅰ『結脚抄師説』乾巻の「おほむね」で、成章の「うちあひ」を「本居派ニテ結ビト云ヘリ」（廿六丁裏）とする。

Ⅱ『結脚抄師説』『挿頭抄師説』とも、呼応関係を認め得る脚結や挿頭に対して「打合」「照応」と書入を施している。

のごときである。このうち、『挿頭抄師説』に言及の多い「照応」は、具体的にはどのようなものをいうのかを述べたものはないが、その形態を見るかぎりでは、今日の国文法にいうところの陳述副詞の呼応関係に近いものとまではいうことができる(15)。また「うちあひ」を「結び」と同じものとしてはいるが、『結脚抄師説』では

靡つめ（係助詞や不定語を伴わない連体形終止）、片響（係助詞や不定語を伴わない「けむ」「らむ」「なむ」などによる終止）ノ二ツハ本居ニテハナシ。中ニモ、風のすゞしき、カク詠トキハ、のトきト結びトナルト云、風もすゞしきト云トキハスベテ誤リト云ヘルゾ、非ナルコト也。此ハ、靡詰、片響ヲ立ヌ故ナリ　（乾巻　おほむね廿五丁裏）

のように、『詞瓊綸』などに見える「の」の「結び」は、『あゆひ抄』の「なびきつめ」「かたひゞき」に従って否定しており、必ずしも本居学説を無条件に受け入れているわけではない(16)。また「疑属」の「や」「か」の「打合」については、「靡」との呼応よりも、（たれ―か）（ぬしや―たれ）などといった、「疑の挿頭」（不定語）との関係に記述の重点を置いている(17)。

二、『あゆひ抄』『かざし抄』の証歌への註釈

『あゆひ抄』『かざし抄』の証歌は、成章にとっては、『あゆひ抄』の「おほむね」に「みあはせむたよりとせる」（刊本　四丁表）というごとき、研究対象となる歌語の実例としての性格を持つものであり、それ以上の関心は払われていないが、『結脚抄師説』や『挿頭抄師説』は、この証歌について成章の学説に対する場合と同様に詳細な註釈を試みている。その記述の実際は、大半が歌の内容に関するものである。ここではその中でも、特徴的なものを二例挙げる。

α成章が問題としている箇所について多く言及しているもの

『あゆひ抄』における「らむ」の「かたひゞき」に関する記述

「らん」のかたひゞきには其詞の上に「など」、いふ頭（＝挿頭）をかぶらせて心えらるゝ哥もあり

（巻四　一四丁表～同裏　なお引用中の「　」は、実際には□の囲みである）

をその証歌

久かたの光のどけき春の日にしづ心なくはなのちるらん

への註釈に

日にノ下ヘナド、里言ヲ入ル、ハ、コ、ヘ疑ノ頭（＝挿頭）ガ入ラネバナラヌ処ナレドモ省キタル故ニナド、入ル。コ、ガ片響ノ詠ミ方ナリ。長閑けきハノンドリシタルコト、しづ心なくトハジツチリトシテ居ヌコト也。ソハソハシテ居ルノナリ。春ニツレルモノナレドモ、今ト成リテハ春ニツレヌ。カ、ルノンドリシタル処ニ、ツレヌト見エテ、花ガソハソハシテ散ルハトナリ。幽（「心」の意か）ハ、春ニソダテラレナガラ、其春ニ今トナリテハソハヌト云モノハドウ云モノゾト云意アル也。表（「詞」の意か）ハ散花ヲ詠メリ

（『結脚抄師説』利巻　将倫一四丁表　傍線但馬　証歌の出典は古今集巻二）

のように反映させている。この証歌について『あゆひ抄』では、「しづこゝろなく」の右に「ナド」、「らん」の右に「デアラウゾ」と里言訳を付すのみである。

β証歌の原典の詞書や返歌について、特に詳細に言及しているもの

『かざし抄』における挿頭「さすがに」の証歌

あま雲のよそにも人のなり行かさすがにめにはみゆる物から　（中巻　十四丁裏）

について

コレ有常ノ女ノ哥ナリ。業平ノ馴染テ居タルナレドモ、少シ疑フ処モアリタルニヤ、昼ハ来テ夜ハ泊ラズ。古今ニ前書アリ。業平の朝臣紀有常の女にすみけるを、うらむる事ありて、しばしのあひだ、ひるは来て夕さりはかへりのみしければ、よみてつかはしけるトアリ。業平ノ此哥ニ返シアリ。「行かへりそらにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなりトアリ。餘所ニ成リ行ヒタ（原文のまま）ノナレバ見エヌ筈ナリ。其見エヌモノガ見ユル故ニさすがにト出タルナリ。テウド雨雲ノ余所ニ成リユクモ同様ニテ、見エヌモ同ジコトヂヤトナリ。業平ノ返シノ意ハ、行かへりトハ、昼ハ来テ夜ハ皈ル処ニ掛ケタリ。ふることはトハ、経テユクコトニテ、其トキヲスゴシテユクコトナリ。そらにのみしてトハ、逢ハヌモノ故ニナリ。逢ハヌカライタヅラニシテ居ルノナリ。わがゐる山トハ、有常ノ女ノ家ナリ。ソレヲ住ムト云テ、ソレヘ寝泊リスルカラ我ガ住ム山ト直グニ云ヘルノナリ。風はやみなりトハ、風ガ早サニテ此方ニ替ハレルコトハ別ニナケレドモ、ソチラガ悪ロヒ（「わろい」とよむか）ニヨリテノコトヂヤト云コトヲ云ヘルノナリ

（『挿頭抄師説』中巻　三三丁表～同裏　傍線但馬　証歌の出典は古今集巻一五）

のように、詞書と返歌（傍線部）を引用し、それらをも含めた註釈を試みている。これは『かざし抄』では、「さすがに」を「さうはいひつゝもやはり」や「さうはいふものゝやはり」という里言に対応させるにとどまっている。

おわりに

ここでは、以上に見てきた資料の内容から考えられる問題点を指摘する。

第一に問題となるのは、『結脚抄師説』や『挿頭抄師説』の記述全体の有り様の意味、具体的には、成章学説への註釈と、証歌への註釈とが、併存していることの意味である。『あゆひ抄』や『かざし抄』を単に語学的研究の書としてとらえるのであれば、成文らのごとき名歌観賞的な証歌の取り扱いは必要ではないからである。

次に問題となるのは、御杖学説との関わりである。成文が師事した比禮雄や美楯は、いずれも先に記したように御杖晩年の門弟であり、また御杖にも、本稿で言及した音義説のほか、和歌註釈などの、成文らと表面的には共通性を認め得る研究が存在する(18)のであって、現段階では『結脚抄師説』『挿頭抄師説』の記述内容には、どこまでが後期富士谷学派に特有なものなのか、必ずしも明確ではない箇所も見受けられるからである。

今後は、この二点を中心的な課題として後期富士谷学派の歌道のあり方を解明しようとする。

註

(1) 「歌学」「歌論」の別は、『和歌大辞典』（昭和六一年明治書院）の「歌論」の項で谷山茂氏が「それ（歌論）は和歌に関する知識を客観的に集大成した歌学とはちがい、より主体的ないとなみである」（一九九頁）とするのに拠った。

(2) たとえば、勉誠社文庫16『あゆひ抄』（中田祝夫解説　昭和五二年）の解説（二九頁）などがそれにあたる。

(3) 「歌論史　近世」（内野吾郎執筆『和歌文学講座2　和歌史・歌論史』（和歌文学会編　昭和四四年桜楓社）所収）三〇一頁の記述に拠った。

(4) 「谷田文庫」については『富士谷成章全集　下』（昭和三六年風間書房）八六〇頁参照。なおこの所蔵印は後述の『奥呂九ケ條傳』や『北邊家説四具』の巻末にもある。

(5) 後述する大岡山書店版『かざし抄』では『成文註「あゆひ抄」』、竹岡正夫氏の一連の著作では『脚結抄師説』（傍線但馬）として紹介せられている。

(6) 成文（元廣）が晩年に、成章や御杖に関する資料の多くを、門人に譲り渡したということが『新編富士谷御杖全集　第六巻』（三宅清編纂　昭和五八年思文閣出版）の解説（一～六頁）に記されており、それらのほとんどがこの『御杖全集第六巻』で活字化せられるまで世に出ることがなかったという事実などから、本稿では成文をもって富士谷家の歌道がほぼ絶えたとみなすこととする。

(7) 奥書に「成章遺傳」と記されている『奥呂九ケ條傳』は、『結脚抄師説』や『挿頭抄師説』と筆勢が似通っており、また「成文云」とある割註も見えるが、原著者については明記せられていない。本稿ではこの書を翻刻した竹岡正夫氏が、その奥書の内容から行なった推定に従うこととした（『富士谷成章全集　下』八六〇～八六二頁）。なお「奥呂」のよみは、『挿頭抄師説』に「オキロ」とせられている（上巻　序五丁表）。

(8) この書については拙稿「成章遺傳の基礎的研究　―合田文庫本の検討を中心に―」（『国語学　研究と資料』第19号〔平成七年一二月〕所収）一六～一八頁に簡単な紹介を記した。

(9) 体言、用言を五十音順に配列している『四具攷證録』（全七冊）は、竹岡正夫氏が『富士谷成章全集　下』に紹介しているが（八七〇頁）、そこには成文や美楯のほか、御杖の主要な門人たちの名も見えるということである。なお『四具攷證録』の表紙は、『増訂　日本文法史』（福井久藏著　昭和二八年風間書房）の巻頭写真として見ることができる。

(10) もっとも成文と比禮雄とでは解釈を異にしている箇所もいくつか見られるのであって、たとえば『あゆひ抄』の「内外」（有情非情）と「裏表」（自他）との違いについて比禮雄が割註で

内外ハ无形ニ付キテ云ヒ、裏表ハ有形ニツキテ云ガ違ヘリ

（『結脚抄師説』乾巻　おほむね廿八丁裏～廿九丁表　傍線原文）

と記しているのに対して成文は

比ノイヘル、内外ハ无形ヲ云ヒ、裏表ハ有形ニツキテイヘルトハ、カツガツイハレナキコト也。内外ハ則有情非情也。裏表ハハ（原文のまま）則自他也。サレバ形ノアリナシニカ、ハルベカラズ。アサハカニミレバ、内外、裏表、大凡同ジ様ニ思ヒナセルヨリノコト也。有情非情、自他、ソレ別アルコトヲアヂ□（「ハ」か）フベシ　（同）

と批判的な書入を加えているのである。

(11)『富士谷成章全集　下』に紹介せられている『脚結抄集解』という『あゆひ抄』註釈書の奥書が、『阿遥比抄乎須受』のそれとほとんど同じであり（九七四～九七六頁）、竹岡氏の解説によると、同じ奥書を有する註釈書は他にも数種類存在しているとのことである。なお『阿遥比抄乎須受』は、山田孝雄『國語學史要』（昭和十年岩波書店）ほかの国語学史関連の書にしばしばその名を見ることができるが、詳しい考察はいまだなされていないようである。

(12)『装圖解』及び『装鈔圖説引證』は、一般に「御杖の装抄」として知られているもの（たとえば『御杖全集第七巻』所収の『脚結抄装圖解』など）とはまったく異なるものである。なお、これらの資料については、拙稿「解題　成章遺説研究資料」（『国語学　研究と資料』第21号所収　平成九年）に書誌解題を記した（二五～二六、二七～二八頁）。

(13)『国語学史』（古田東朔・築島裕著　昭和四七年東京大学出版会）二四五頁参照。

(14)この点については森重敏氏が『日本文法通論』（昭和三四年風間書房）六九～七〇頁に詳しく述べている。

(15)「照応」という術語は『奥呂九ケ條傳』にも見える（記述内容はやや異なる）が、それをも含めた「照応」の形態については、拙稿「うちあひ」研究＜外＞史　―後期富士谷学派の『照応』研究について―」（『国語学　研究と資料』第20号所収　平成八年）にまとめた。

(16)この他、本居学説への言及として、やはり『結脚抄師説』乾巻の「おほむね」に比禮雄が「伊勢人宣長モ、此抄（『かざし抄』『あゆひ抄』をさすか）ニモトヅキ考ラレタルコト少ナカラズ。サレドモ其深意ハ得ラレザリケンコト、詞ノ玉緒又ハ詞のやちまた等ニシラル、也。古今集遠覧（原文のまま）ト云アレドモ、里言ニ至リテハ、一向ニウケガタキコト多シ」（一五丁表）と述べている。

(17)ただし「か」と「や」とを比較すると、記述の比重は圧倒的に前者に偏っていて、特に『挿頭抄師説』における「疑の挿頭」の記述への註釈は、ほとんどが「か」との関連から説かれている。

(18)代表的な『百人一首燈』（『新編富士谷御杖全集　第四巻』（三宅清編纂　昭和六一年思文閣出版）所収）のほかでは、古今集や後撰集、あるいは伊勢物語に関するものが『新編富士谷御杖全集　第三巻』（三宅清編纂　平成元年思文閣出版）に収められている。

＊資料からの引用に際し、一部私に濁点、句読点を付した。また異体字や省文については、通行の字体に改めた。

――大学院文学研究科研究員――